

発行：2006年11月15日/発行責任者：特定非営利活動法人 シャンティ山口 代表 角 直彦
連絡先事務局 〒753-0215 山口市大内矢田717 佐伯昭夫 電話/Fax 083-927-4083
ホームページアドレス：<http://www.kvision.ne.jp/~shanti/>

～シャンティ山口 2006 年度—第 4 号～

「特集」～タイ・パヤオ地域環境保全事業～

タイのトイレがあったか村福賀“のんたの会”メールマガジンに紹介されました。

■□あったか村だより■□ 第31号 2006/08/29 (火) ■□

<http://www.haginet.ne.jp/users/poco-a-poco/>

◇◆ 特別寄稿 ◆◇

タイのトイレから日本がみえる！ タイのトイレ・衛生環境事業の実践報告

NP0 シャンティ山口 事務局長 佐伯 昭夫

以下に目次を記載します、内容は詳細なレポートになっています。(必用な方は、事務局まで連絡ください。)

1、トイレに係わった背景・現状・問題点

- 北タイのモン族 ○ 暮らしと現状 ○ シャンティ山口の活動と民族の自立 ○ セーンサイ村での活動の開始から今に至るまでのおもたる内容、内容に対する成果及び活動に対しての他の村への影響反応
- トイレ

2、事業の必要性・妥当性

- 日本の実績データから現地状況を考察すると ○ 妥当性

3、事業の目標と達成をはかる指標

- (1) -a 事業終了時の達成目標 (事業目標)
 - 生活衛生面 ○ 農業への利用 ○ 環境への配慮
- (2) -a 事業終了後、将来的に達成したい目標 (上位目標)
 - 山岳民族の村への普及

引き続き“水処理倶楽部通信”にも取り上げられました。

■□水処理倶楽部通信■□第257号 2006/9/11 (月) ■□

△△水処理の情報交換と交流誌△△編集発行：通信編集委員会

【発行ページ】<http://homepage2.nifty.com/watertreatment-club/>

★ タイ・パヤオ方式の自然循環浄化システム

●タイ・パヤオ方式の自然循環浄化システムは、NP0 シャンティ山口の佐伯さんたちの取り組みの結果生まれた「徹底したローテク」による装置を紹介します。

タイ国の山岳少数民族モン族の支援を行っている NPO です。支援の 1 つとして自然循環浄化システムの設置を報告しています。

モン族の村で普及しているタイ式のトイレは、「穴あきのコンクリート製の井側（今も、このタイプ）を設置し貯めるもので上部蓋の部分にメタンガスによる爆発を防ぐためのガス抜きがあり、溜まった糞尿の水分は、自然に地下浸透する。」というものだそうです。

この浸透処理槽は、タイのトイレ、補足の写真 <http://atta-an.seesaa.net/article/22962730.html> に写真 <http://atta-an.up.seesaa.net/image/thai06.jpg> が掲載されています。

この方式は、「雨期になると地層、土質の影響もあり、地下浸透が緩慢となって便槽に雨水が流入し糞尿が地下水（飲料水用井戸）を汚染すると共に地上に溢れ出て、悪臭を放っている。」という状況であったため、現地にて調達できる材料を使って、タイ・パヤオ方式の自然循環浄化システムを設置したとのこと。設置の様子や、その後の状況は、以下に報告されています。

NCP モデルシステム 第 1 号 完成 <http://www.kvision.ne.jp/~shanti/payaoreport/payaore3.html>



施工実績第 3 号目の「NCP システム」<http://www.kvision.ne.jp/~shanti/payaoreport/payaore200601.html>



コトイレ第 4 号目が完成

<http://www.kvision.ne.jp/~shanti/payaoreport/payaore200605.html>



この活動は、読売新聞でも紹介されたそうです。

NPO シャンティ山口の佐伯さんの記事 <http://atta-an.seesaa.net/article/23214989.html>

貧困が覆う国や地域には、食料や医療の支援が欠かせませんが、彼らを助けるのは、何よりも教育だと私は思います。それを実践し続けている佐伯さんは、素晴らしい人だと思いました。

この事業が広がって「地球中の少数者」が安心して暮らせる地球に、さらには地球全体がいろんな意味での少数者の集まりになればいいなと思いました。（長）

タイ北部の山岳少数民族を支援しているNPO法人「シャンティ山口」事務局長の佐伯昭夫さん(61)(山口市大内矢田)は、この10年余りで32回、タイを訪れ、子供たちの教育を援助してきた。元々は山口県企業局で工業用水の管理などを担当した技術者。2005年3月に退職後は、「これまで培った知識を生かし、彼らの自立を応援したい」と、微生物を使って汚物を分解するトイレの普及にも力を入れている。

元技術者の知恵 バイオトイレ導入



タイ山岳民族 自立支援10年

ほとんどの家は

5時間余り。少数民族が住むパヤオ県にたどり着くには、景色は一変した。道路は赤土。

この活動に取り組むきっかけは、1人の青年僧との出会いだった。たまたま会話を交わしたのは、1987年に県内で開かれた福祉関係のイベント会場。僧はシャンティ山口の前身で、80年に東南アジアの難民支援活動を始めた「曹洞宗国際ボランティア会真支部」のメンバーだった。

僧は、インドシナ半島などの山岳少数民族について語った。ベトナム戦争やラオス内戦に伴い、タイ北部など国境の山岳地帯に逃げ込んだモン族。難民キャンプの小屋はすし詰め状態で、地べたで寝る人たちが多かったという。

ベトナム戦争終結は75年。テレビニュースが何度も伝えた、小舟で海外に亡命しようとする「ボートピプル」の姿は脳裏に焼き付いていた。だが、モン族のことも、戦争で少数民族が影響を受けたことを知るのも初めて。衝撃を受けた。「何もしてもらわなくていい。あなたたちに、来てもらえただけでいいんです」。支部の別のメンバーが、難民キャンプでモン族の高齢女性からかけられた

言葉を覚えてくれた。お金や物を援助するだけではない。「心の支え」も必要とされている。それな

ら自分にもできるはずだ。活動への参加を決めた。

山口のNPO事務局長 32回訪問

かやぶき屋根に竹壁というつくりだった。素足で暮らす住民たちは、幼いころの記憶とだぶった。親近感がわいた。以来、年3回のペースで足を運んでいる。

96年、モン族の居住地・同県セーンサイ村の近くに中、高校生向けの学生寮を開設した。就学困難な子供が寮生活を送り、学校へ通うのを支える。これまでに約50人が巣立った。

村の幼稚園の先生になったり、バイク店で働いたりする卒業生もいる。「彼らの懸命な様子や楽しむ姿を見るのが、私にとって何よりの喜びです」と笑う。

村で数年前に井戸の水質を調べると、大腸菌に汚染されていた。村のトイレは水分を地下浸透させ、土壌

処理する仕組みだが、雨期には雨水が浸入し漏れ出すこともある。山岳民族は人糞を肥料に使う習慣がなく、くみ取りが必要になるが、貧しい家に費用をやりくりする余裕はない。

そんな現状をみて考え出したのが、微生物を活用して汚物を分解するトイレの導入だ。技術畑を歩んだ知識が生きた。

素焼きした粘土など現地ですりこみ材料だけで作れないか。2年余り試行錯誤を続け、05年10月に理想に近いトイレが完成した。これまでに計4か所に導入。評判は上々で、ほかの村からの問い合わせもきているという。

「作ってあげるだけではいつまでも自立にはつながらない。彼らだけで作れるようになれば」。それがタイ社会で生き抜く自信につながるという。

活動の問い合わせは事務局(0836・927・4080)へ。



モン族の民族衣装や子供たちの写真を前に、支援の必要性を訴える佐伯さん

内田正樹

新聞記事の反応

先日の新聞を見ての問い合わせ等数件来ています。直接の募金等に繋がらなくても関心を持った人や、シャンティ山口の存在を確認された人は、多いと思います。

その一つに、異業種交流会「養心の会」の前田敏統様から例会でのお話を依頼されました、すぐさまお願いしました。10月5日に予定されています。

この会は、すでに135回となりその都度著名な方々に講演依頼をされ、世の中の出来事に関心を持ち少しでも社会のお役に立てるよう個人の心の洗濯と世界平和と皆さんの幸せを願って充実した暮らしができるよう、会を通じて活動をしておられるグループです。（こんな立派な会に私としては、場違いですが、皆さんに戦争の悲劇と翻弄された人たちの状況を知っていただきたいと思っています。）

そのほか以下の問い合わせもありました。（参考までにお知らせします。）

シャンティ山口様

シャンティ山口の活動で、古着衣料の回収を行っておられたと思いますが、現在も回収しておられますか。もし活動を続けておられましたら、回収の方法やシステムなどについて、教えてください。

2006年9月11日

お返事 某市担当者様

お便りありがとうございます。

古着の回収については、全国の皆さんより善意が集まり長期に亘り山岳民族や、ミャンマー難民の人たちに、喜んで頂きました。

近年、直接関わる周辺の状況が、おかげさまでかなりの改善や、以前のように衣食に困り死者が出るような状況から、何とか脱することができました。

当時もですが、この運動は、とても大変です、多くの人手を必用とし（仕分け、洗濯、段ボール詰め）また、輸送費が、大半を占めます、当時は、段ボール1個当たり2,000円いただきやりくりしていました。

善意はお金との比較は、したくないものの、それでも収支は、赤字になっていました。古着の半分以上は、いくら善意とはいえ、捨てざるを得ないようなものが集められてきました。（捨て場に困っていた人が、便乗するケースが多く見られました。）いくら困っている人たちとはいえ、自分も着たくないようなものを、プレゼントすることはできません。

私たちグループは、割に合わない運動をあえてしていたのは、皆様の「善意」「こころ」「一緒に生きているよ」と言う、メッセージが現地の人たちに届けられその気持ちが伝わったのが、大きな成果だと思います。

今は、スタッフが、訪問するときに、家族単位のタオル衣類は、お土産として持って行きます。

その様な事から、古着の運動は、やっていません。

今後やるとしても、衣類の募金活動として、お金で、現地の必要に応じた支援をする方が、無駄も出ませんし、現地の人に喜ばれます。

国内でも、ほとんどの団体は、国内で回収し、仕分けし（これも業者に丸投げも多い・現実できないと思います。）専門業者に買ってもらって、善意募金に変換しているようです。また、国連機関を通じた支援は、ものによっては、輸送費の一部補助制度もあるようです。が、支援の規模や、団体の審査などが、あります。（国際交流協会などで、アドバイスしてくれると思います。）

状況は、当初の、何とか食べて、生きているという状況から、少し良くなり、日一日と活気がみえてきています。まだまだ生活の安定とまでは、生きませんが、それぞれ、夢とか希望とかが語れる状況になっています。

今後ご関心をいただければ、幸せです。

シャンティ山口 HP をご覧下さい。

<http://www.kvision.ne.jp/~shanti/>

「タイで活きた 日本の農家の知恵」

肥溜めと畑をめぐって タイにも元からあった！

NPO シャンティ山口 理事 安藤公門
(環境プロジェクト アドバイザー)

「へえ、日本にも土壌処理があったのですかタイの土壌処理は、欧米・日本のコンサルによって都市の下水道に追いやられたのに」

1999年、北九州市で開かれた日本トイレ協会のトイレシンポジウムでのこと。招かれて参加されたタイの研究者と技術者は、驚きの声をあげた。演壇でこれからのトイレと水処理について日本や各国の専門家と意見を交換して、そのあとちょうどパネル展示をしていた私たちの土壌処理システムを見ての感想だった。驚いたのは、無理はないといえる。タイの農山村部にあるタイ式土壌処理は、たしかに欧米日本の先進国のコンサルタントや技術者によって、「非衛生的である」「原始的ある」「下水道の本道ではない」と否定され続けてきたからだ。欠点を是正してよりよいものにする視点はまったくなかったというのだ。

そのときのタイの研究者の言葉が耳に残っている。「バンコクなどの都市中心地ならまだ欧米型下水道を推進するのはわかるが、農山村部では、独自のものがあっていいのではないかと主張してずいぶん対立し、苦労しました。日本にも土壌処理があって研究開発されているなら、私たちも捨ててしまうわけにはいかない」

日本の農村の知恵、肥溜めと畑

その後7年たって、紆余曲折を経て、タイの現地で現地資材を使って、実用的で衛生的で、現地の条件に叶った方式が完成した。それが、今回展示した「タイ・パヤオ式の自然循環浄化法」である。ただし、タイの研究者・技術者との共同開発ではなくて、NPOシャンティ山口の今までの活動の延長に現地調査と試行の中からうみだされたものである。そこに活かされたのが、日本の農家の知恵とそれが生んだシステムだった。さて、ここで活かされた日本の農家の知恵とはどんなものか説明しておく必要がある。それは、「肥溜めと畑の関係」と要約できる。通説では、室町時代に出来上ってとされている。江戸時代に完成したかたちになり、つい最近、戦後にも使われていたが、最近を知る人も少なくなっている。肥溜めとは、農家のトイレの下に据付けられた便槽から、いっぱいになったら運び出してためておく畑の脇などにつくられた土中のタンクである。素掘りであることが多い。底に砂や礫を敷いたり地方によって少しずつ異なる。ここで約3月程度溜められて、発酵させる。発酵の度合をみて、今度は、畑に運ばれ、畑の畝間などにヒシャクで散布される。ここで大事なことは、便槽から直接畑に撒かれたのではないということだ。発酵させて、その中間水を畑に液肥として使ったことである。大腸菌はここで死滅する。

無動力で放流しないエコ・システム

この過程は、現代的な水処理の視点で見直せば、「嫌気性処理＋土壌処理」ということができる。無動力で薬品を使わず、発酵させる時間と土壌菌の働きに依拠する極めて合理的なものである。さらに、例えば、畑の地力をます肥料として活用されている点で、すぐれて循環的なものである。ある程度の年齢と世代の人は、この「肥溜めと畑の関係」は親しいはずだ。酒席などで子供時代の話になったときに、落ちた経験などおおいに話のはずむことがらだ。

井上ひさし著「コメの話」には、凶解入れて肥溜めが出てくる。

中は澄んでいてきれいだった、とある。肥溜めと畑の関係は、一戸の農家の汚水処理としてみると、汚水の発生したその場で処理される「発生源処理」の典型といえる。

公共水域に放流して、河川や湖や海を汚すことがない。「元で絶って」いるのである。

循環型社会としての江戸時代

また、社会的な全体の過程でみると生産と消費の間に無駄のない、棄てることのない、循環型社会の典型といえる。今、盛んに言われている循環型社会のモデルといってよい。

そして、既に多くの識者によって指摘されているが、日本の江戸時代のトイレ・糞尿の利用がそのパターンだった。京や大阪、江戸の大都市のみならず地方小都市においても、都市でつくられた糞尿は、農村地帯に運ばれ、いったん溜めて発酵され、野菜やコメをつくる田地・畑に利用され、地力・生産力の向上に使われた。

ほとんどの場合、農民の側が、都市住民から購入するというかたちをとっている。大名屋敷のは質がよいとか、江戸の長屋の大家は、店子から家賃をとりはぐれても、糞尿の代金でもとがとれたといわれる。人だかりの多い雑踏に公衆便所をつくって一財産つくった商人もいたという。江戸名所図絵には、天秤を担いで、野菜と糞尿の交換を求める人の図が残っている。

河川の船便も運搬専用船が用いられた。

こうして、当時、パリでは路上や川に捨てて不潔極まりない状態だったのに、江戸の町は世界一清潔だったと訪れた外国人が、書き残している。また、ビクトル・ユーゴは「レ・ミゼラブル」の中で「東洋の農民の知恵」として絶賛し、下水道の無駄を批判している。

現代にアレンジする工夫

このすぐれた日本の農家の智恵を現代にアレンジして活かさないか。

配管や土中の資材など江戸の昔にはなかった工夫を加えて、しかも自然循環的な省エネ的な利点を残して、さらに一歩進むものはつくれないか。かなりの人々がチャレンジしている。私たちもそうである。すでに商品化されている。個別の処理・活用と社会全体での循環の実現が目標となる。日本の技術がタイに行った。そこで工夫が加えられた。

日本に戻ってさらに良いものになっていく。その一歩が、始まったといえる。

今度は、タイの研究者・技術者をも含めて、施工体制も整えて、共同で開発できればすばらしいだろう。

シャンティ山口は、そうした技術の開発に衛生環境事業として今後も積極的に取り組みます。

(061013)